

国際交流事後活動ニュース

MACRO COSM

◎特集 第8回世界青年の船

●講演 上智大学法学部 猪口邦子 教授

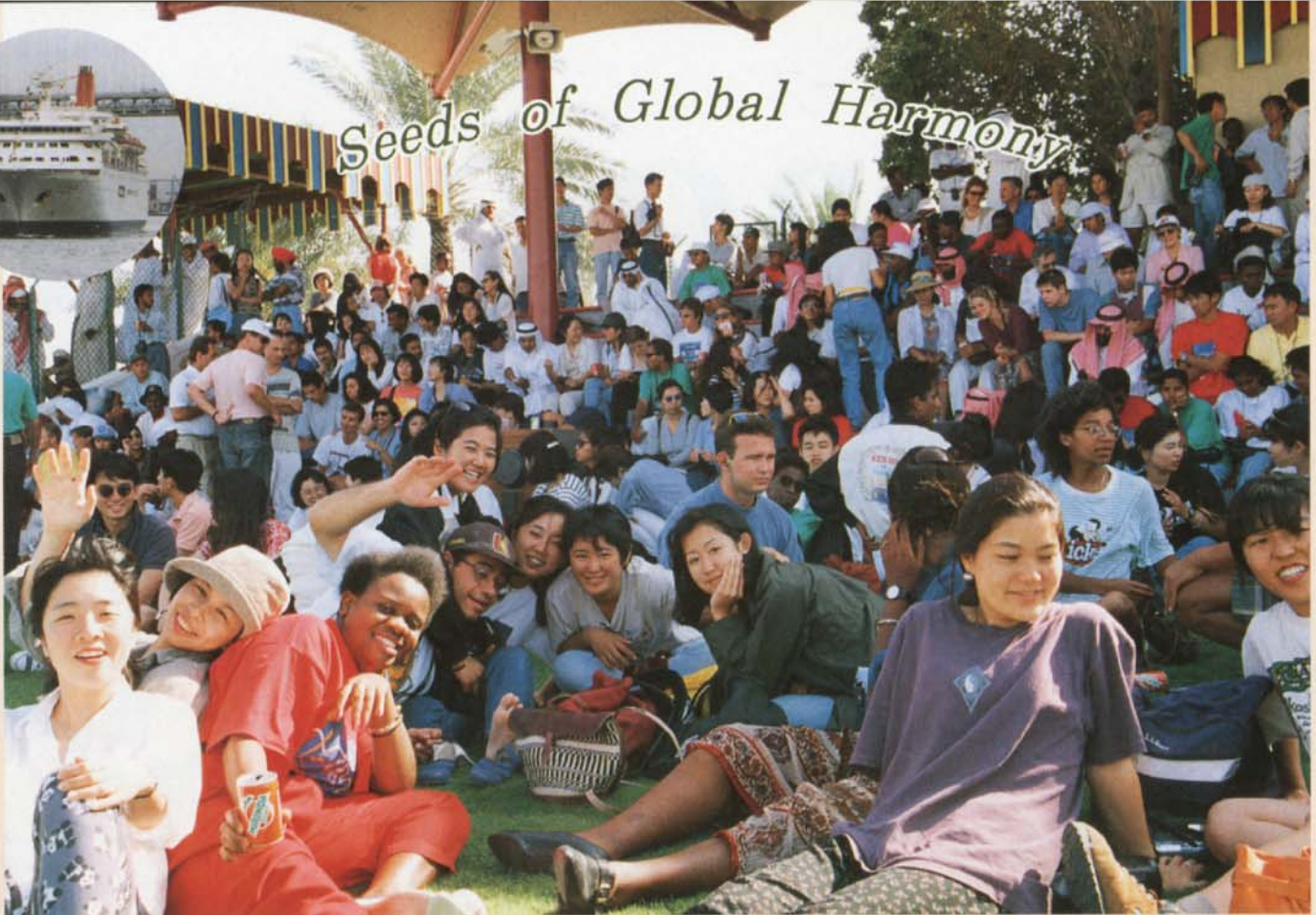
マクロコズム '96.7



vol. 11

(財)青少年国際交流推進センター

Seeds of Global Harmony



▲ ドバイにて

第8回世界青年の船

1月19日

日本(東京)～スリランカ(コロンボ)～南アフリカ(ケープタウン)
～タンザニア(ダルエスサラーム)～アラブ首長国連邦(ドバイ)
～シンガポール(シンガポール)～日本(東京) 3月18日

▼ 南アフリカ・西ケープ州の青少年大臣による歓迎のあいさつ



▶ タンザニアのミクミ国立公園にて



「世界青年の船」は、北・中・南米等方面と南西アジア・アフリカ等方面を隔年で訪問しています。第8回は、後者のコースでした。外国青年は、1月10日に来日して日本でのプログラムを体験した後、出航前研修で日本青年と合流しました。1月19日、「にっぽん丸」は、日本と訪問地である4か国を含む13か国の青年約300名を乗せて東京港を出航し、船内では、講義、ディスカッション、グループ活動等が行われました。各寄港地では、表敬訪問、施設見学、交流活動等が実施されました。



▲ 出航式で、赤城政務次官に決意表明を述べる
椿ナショナルリーダー

～「世界青年の船」の醍醐味は船上生活～



◀ 船の生活は、モーニング・アッセンブリーから始まる



▲ 大人気だったジェリー・クスマノ先生の講義（心理学）



▲ 各国の味を一度に楽しめた
フードフェスティバル



▲ 船内では、スポーツや文化の様々なクラブが
行われます
ミュージッククラブの発表風景



▲ ピースウィークを1週間企画し、平和問題についての
パネル・ディスカッションを行いました

(ケニア)

▼ 船のクルーから航路の説明を受ける参加青年



▼ ディスカッション風景



◀ ナショナルプレゼンテーション・デー▶



結婚式の様子 (スリランカ)



◀ 別れ
(シンガポールにて)



▲ Completion Ceremony で団長から修了証を受ける
ノルウェー青年 (ドバイにて)

100% 私らしく

「第8回世界青年の船」参加青年
宮本 和美（広島県）

「2か月間全力投球しよう」と決めて参加した「第8回世界青年の船」での生活。始め少し不安があったものの、見ること、聞くことの一つ一つが驚きであり発見の毎日でした。「一夫多妻制ってずるくない?」「アラブ参加青年に女性がないのは、なぜ?」と質問をぶつけたことは数しれず。私の些細な質問に、時には「何でこんなことを聞くんだ?」と言いながらも答えてくれたPYのお蔭で、聞けば聞くほどその人やその国の文化が少しずつ身近に感じられて、それが楽しくもあり嬉しくもありました。

このような生活の中、私が船内で行った主な活動は、ナショナルプレゼンテーション・デイ、食文化紹介のフードフェスティバル、そして広島参加青年恒例の平和学習の実行委員でした。

どれも、日本人が中心となった企画でしたが、意見をぶつけ合い「やろう、やってみよう」と言ってくれる仲間と共に一つのことを創り上げていく感動を体験できたのは貴重なことでした。



作者中央 ▶

「HIROSIMA」&「核に時代をどう生きるか」

特に、乗船前から準備を進めていた平和学習では、以外にもアラブやアフリカのPYが興味を示してくれたり、広島について熱い眼差しで色々な質問を投げかけてくれた人が想像以上に多く、「私たちが伝えるメッセージを異文化からきた人達はどのように受け取ってくれるのだろうか。」という不安は日増しに薄れていきました。

2回に分けたセミナーの1回目「HIROSIMA」では、220人以上、2日後に行った「核の時代をどう生きるか」では100人近い参加者があり、最後に行ったディスカッションでは様々な視点からの意見を聞くことができました。

国も文化も関係なく本音をぶつけ合えた、この

主 要 内 容

「第8回世界青年の船」…………… 5~8	「現在の国際社会において
世界に広げたい	日本が考えるべき新たな視点」…… 14~17
「世界青年の船」の夢 …………… 9~10	上智大学法学部教授 猪口邦子
SIGAに参加して …………… 11~12	国際交流各事業担当係紹介 …………… 18
ジョルダン再訪記 …………… 12~13	おたよりコーナー …………… 19

〈表紙の説明〉

タイ
ニバプ・ウタクンさん
「家族」
アジアのこども絵画展より
優秀賞受賞作品

平和学習が終わる頃には、今まで私にとってズッシリ重いものであった「国際交流」という言葉は薄れ、代わりに外国人、日本人という国境の無い「人間交流」という言葉が前面に出てきました。人を知れば知るほど、その人を通じて宗教、文化、各国の価値観が自然に私の中に入ってきて、私の中で独自の文化が創られる、そんな感じでした。人に接し、理解してこそその「国際交流」を実感できた2か月でした。

より深いつながりを求めても

下船して時を経た今、共に泣いたり笑ったり怒ったり落ち込んだりした「Nippon-Maru」の仲間が、“We are family” 船の合言葉そのものだということを改めて思います。船内で夜遅くまで(朝まで!?) 語り合った人、あまり話すことができなかつた人、いろいろありますが同じ場面で同じ思いを分かち



忘れることなき生涯の想い

“I miss you” “Thank you” そんな言葉があちらこちらから涙声で聞こえる。ずっと一緒に生活してきたOPYと別れの時。ドバイとシンガポールで抱き合いながら、皆が流した涙。今思い出しても胸がキュンと痛くなる。それぞれの日常生活に戻っても、きっと皆同じように、時々思い出しているのではないだろうか。

2か月間、スリランカ、南アフリカ共和国、タンザニア、UAE、シンガポールを寄港しながら船



▲ 皆でお茶を楽しむ(茶道クラブにて)

合えた船の仲間は、一人残らず私の大切な宝物です。「あなたたちをもっと知りたい」という興味は一生つきることはないでしょう。100%の私らしくいられた2か月間、そんな私を受入れてくれた世界、日本中の「My family」に心からの感謝の気持ちと愛で一杯です。

みんな、大好きだよ!

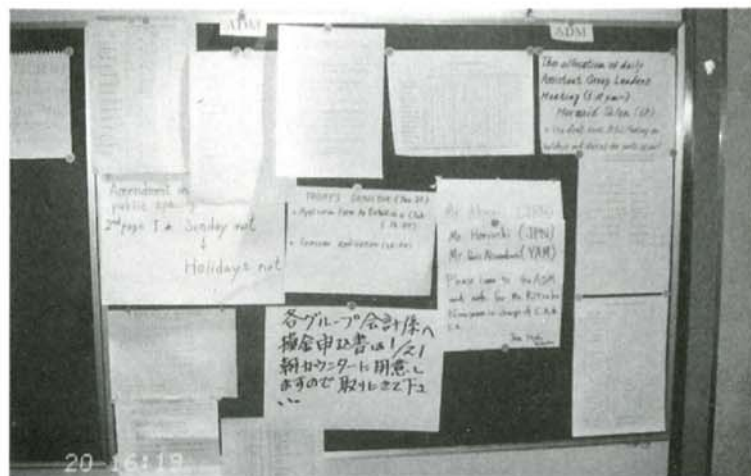
「第8回世界青年の船」参加青年
服部 朋子(埼玉県)

内で様々な活動をして共に過ごしてきた。ドルフィンの群れや真っ赤な夕日、満天の星空という感動的な大自然の中、密度の濃い交流が行われたと思う。セミナー、国別プレゼンテーション、パーティー等スケジュールは目白押しで次々新たな企画も生まれ、一日目一杯フル回転であった。寝るのが勿体ないと言いながら、朝まで語り合うことも度々であった。

文化を通じて心伝える

私自身の活動としては、茶道を通じて日本の総合芸術を楽しむことを目的としてクラブを設立した。点前や礼儀作法を体験し、着物を着たりする一方、文化的背景の理解に努めてゆったりした一時を過ごせたと思う。希望者には自由時間も活動をし、特に外国人青年の習得は目を見張る程早く、エキシビジョン・デイでの盆点前の披露は拍手喝采であった。正座で足をしびらせて困ったり、宗教上おじぎができない人等色々あったが、ラマダンを食べられないお菓子を包んで、「夜の楽しみだ」とにっこり笑って帰る彼らの顔は今でも忘れられない。そしてアラビアン・コーヒーやスリランカン・ティーの日を設け、各国のお茶の美味しい飲み方や作法を学ぶことで、様々な習慣を知り、穏やかなリラックスした交流時間も有意義であった。

私は、これまで短期間の交流事業に参加したことはあったが、2か月という長期間は初めてのこ



とであり、またそれが魅力でもあって参加を決意した。次第に親しくなっていく分、トラブルも発生するのは自然なこと。長期間ならなおさらであるが、フォローしたり話し合う時間や考える余裕があるのも事実である。ちょっとした衝突を越えていく度に、さらに親近感や情が増していく。心残りの事も正直に言って、沢山ある。今後のメンバー同志の繋がりや事後活動が、私の船での2か月の真価が問われると痛切に感じているところである。

「第8回世界青年の船」 で得たもの

「第8回世界青年の船」参加青年
赤木 功（大阪府）

「自分自身を見直す旅」私にとって今回の「世界青年の船」（以下世界船）は、日本人である自分、ワースワーカーとしての自分そして29年間生きてきた自分を見直す旅となった。

▼ どんなふうにかぶるのかな？ ロープワークに挑戦



日本人としての自分

多くの外国青年（以下 OPY）と話をしているといかに日本人である私が日本のことを知らず、又、日本に対して誇りをもっていないか、気づかされた。アラブの仲間に「何故日本人は自分の国を褒めないのか。自国に自信をもっていないのか。」と言われた。私は即座に否定したが、確かに日本参加青年（以下 JPY）は国歌が流れても他人事のようにであったし、自国紹介でも何が日本らしいかということが問題となった。日本人として恥ずかしいことであったが、今回この事に気づいたことは私にとってかなりプラスとなった。今後は日本のことについても知識を高めていきたいと思った。

ユースワーカーとしての自分と自分自身

東京事前研修で職業がユースワーカーというところを知っている人かとよく聞かれた。だが、船に乗ると多くのユースワーカーがいた。他国においてユースワーカーの存在は当たり前であり、必要不可欠なものであった。ユースワーカーが若者に生きるための技術を教えたり、積極的に他の団体と交流する架け橋づくりを行ったりと幅広い活動を展開している。まだまだ、日本の青少年団体は閉鎖的であると感じたと同時にユースワーカーの在り方にも疑問を持った。この船で多くのユースワーカー仲間が出来、今後の在り方について議論していくこととなった。これからはこの生きたネットワークを拡げ、日本いや世界の若者や子どもたちの為の活動を模索していきたいと思う。

また、船内でよく「人が変わった」と口にする

者がいた。私も大海原で OPY や JPY と 2 か月間共に暮らしていると変わった所もあった。しかし、それは内に潜在していた自分がでてきたのだと理解している。その面で自分にもこんな所があったのだという発見の旅であった。

私の考える国際交流

最後に今回の船で得た私の考える国際交流について述べたいと思います。国際交流はよく「相互理解」だと言われるが、心と心の交流の他、文化と文化、知識と知識、人と人の交流が最も大切であると思う。私も過去幾つかの国際交流事業に参加したが、別れ際に感動し泣きあった。

しかし、それだけで終わってしまうことが多かった。相手国の文化や相手の知識などあまり知らず、ただ人との出会いや別れだけに終わってしまったように思う。そして、その後の文通もお互いが楽しかった思い出話や自分の近況報告だけで終わる。これは、自分にとって楽しいが、世の中に貢献しているとは言い難い。

「世界青年の船」では、同じ関心をもつテーマ毎のネットワークの他にクラブ活動、グループ活動など多種多様なつながりをつくり、事後活動に大いに役立てられるような仕組みとなっている。今後それをいかに生かしていくかは各個人の課題となっていくであろう。

私自身、この船で多くの財産（人のネットワーク）を得られたことに大変感謝し、又友人のデニスが言ったように「WE ARE FAMILY」でこれからも強い絆でつながっていききたいと思う。

世界に広げたい『世界青年の船』の夢

椿 景子 (IYEO事務局次長)

■東側航路から始まって

「この素晴らしい経験をこの場限りで終わらせてしまわず、むしろこれからのつながりこそが真の友情だ」という想い。これこそが、世界青年の船同窓会（以下SWYAA; Ship for World Youth Alumni Association）設立の土台に流れている理念だ。

1995年3月、日本青年国際交流機構主催でインターナショナル・リユニオンを「第7回世界青年の船」寄港地であるメキシコのアカプルコで開催することになり、ネットワーク創りに希望を感じた昨年の1月。「第7回世界青年の船」の中で、最初はほんの数人で語り合っていたこの「夢」は、またたく間に第7回参加者の賛同を得て、船内でもより具体的なSWYAA設立に関する草案を作り上げるまでに至った。これを、アカプルコの船上リユニオンで提示し、そこに参加した既参加青年からも同意を得たことで、これまで何度となく検討されていたSWYAAは、東側航路から最初の一步を歩みはじめた。

ニュースレターの発行等、各国AAの地道な交流実績が認められ、1996年1月には、総務庁によりSWYAAの代表者13か国14名が日本へ招かれ、今後の活動についての会議が開かれた。これをきっかけに、より活発なAAの活動が展開され、今では各国の活動報告書や最新の名簿が続々とIYEOへと届いている。

■そして西側航路へ…

東側航路のこうした動きを受けて、第8回でのSWYAA設立に対する参加青年の反応は早かった。各国代表の選考も希望者が多い程で、SWYAAに対する関心の高さを感じた。加えて、1996年3月にドバイで開催された船上リユニオンでも、SWYAAについて討議をし、これによって、完全とは言えないまでも、東西共にSWYAA設立に関して足並みを揃えることができたといえる。

■各国同窓会組織の現状

東側に関しては 既述の通り 年間活動報告書(1995-1996)と最新住所録がIYEOに送付されており、各国の活動状況が把握できるようになった。1996年7月末にはコロンビアAAを中心に同窓会を開催するとの連絡も受けている。

西側についても、下船してからの活動報告が各国から届けられており、1996年12月には、ケニアでのアフリカAA会議 また来年にはノルウェー・ベルギーAAを中心に、SWYAAの会議の開催を予定しているとのことだ。カタールでは、第8回参加青年による写真展が行われて大好評だったとのこと。

また、東西問わず電子メールでの情報交換が活発なものも、SWYAAの特徴だろう。カナダではSWYAAのホームページが開かれ 今後はベルギーでもホームページを開く予定があるようだ。もっとも、全ての参加国に電子メール保持者がいるわ

けではないが、今後の通信方法としてコンピュータが重要な役割を担うことは間違いない。

■今後の課題～日本の役割～

今後の課題としては、各国での参加青年の蓄積、東西 SWYAA の連携、同窓会組織としての事業への関わり方等々が挙げられる。

こうした中で、中心的な役割として期待したいのが、日本参加青年の活躍だ。日本青年については、東西問わず毎年参加していること、多方面から情報を収集することができること、日本の活動組織として IYEO という大きなバックグラウンドを持っていること等のメリットを最大限に活かしてほしいと思う。

「世界青年の船」のネットワーク作りは、結局のところ私自身の夢の実現につながっているよう

な気がする。1996年の3月、ドバイでは私が最初に参加した「第2回世界青年の船」の友人達に再会することができた。この6年間、ほとんど音信不通だったにもかかわらず、瞬時に6年前の関係までタイムワープできた感覚こそ「世界青年の船」の醍醐味だろう。ましてや「世界船に参加していました…」の一言で、回生を越えた親しみを感じることができる不思議さ。

いずれ、東西それぞれのネットワークが一つになり、「世界青年の船」という合言葉だけで気持ちを通じ合える仲間を地球上に増やしていきたい。そんな夢と希望をこの SWYAA ネットワークに託して、今、進み始めた。

こんな夢と一緒に語れる人、実現に向けて協力してくれる人からのご連絡を心よりお待ちしております。

エクアドル「世界青年の船」既参加青年の素敵な企て「少年の汽車」

静岡県青年国際交流機構事務局長 本多 由佳

青年海外協力隊でエクアドルに日本語教師として赴任している友人よりこんな手紙を貰いました。彼女は、「第7回世界青年の船」のPYとお友達です。

『エクアドルグループはとても仲良くなり、帰国後も週1回の集まりを欠かさず、その仲間意識はすごいものがあります。そして、何と彼らは、大きな計画をたくらんでいるのに驚きました。』

エクアドルには、汽車が1本走っているのですが、それを使って「青年の船」ならぬ「少年の汽車」を企画しようというのです。

首都キトやグアヤキルの優秀な高校生に参加してもらい、汽車の旅の中で様々なプログラムを通し、将来のリーダーシップを執るであろう彼らを育てるといふものだそうです。スポンサー探し、企画、実行の全てを彼らがボランティアでしようというのです。

自分たちが選ばれて「世界青年の船」に参加したという誇り、その貴重な経験をどこかに活かさなくてはという使命感。皆が燃えていて感激してしまいました。そして、エクアドルの将来は、明るいと感じました。』

～ SSEAYP International 第9回総会への参加者より～

ホームページに夢を乗せて

「第6回東南アジア青年の船」参加青年
安藤 康成

私は今回初めて SIGA に参加させていただきましたが、想像していた以上に各国の既参加青年が多数集まっており、正直に言って驚きました。これだけの大掛かりな会議を準備するには、各国の事務局の人達の努力は並々ならぬものがあったと思います。本当にご苦労さまでした。

さて、早いもので私が船に乗ってから既に17年が経ち、その間に同期の第10回のリユニオンをシンガポール、第15回をマニラで行い、来る1999年に第20回のリユニオンを日本で行う予定となっています。前回には、日本の参加者が駐在地のアメリカやタイから駆けつけてきて総勢25名が参加しました。しかし、なかなか連絡の取れない国（マレーシアやインドネシア）や仲間ができており、次回の第20回の連絡をどのように行っていくかが、悩みの種となっていました。そ

こで今回の会議中に、フィリピンの同じ回の参加者が International School でコンピュータを教えており、彼の E-mail Address がわかったので、早速帰国してからインターネット経由で連絡を取り、今後の準備の進め方を話し合っています。現在、日本、シンガポール、タイの E-mail Address List を作成中で、第20回のリユニオンは、参加できない人もその詳細をネットワーク上で知る事が出来るようになるのではと期待しています。

もし、総務庁または IYEO で SSEAYP のインターネットのホームページが開設され、クリックするだけで各国の参加者の近況や住所が分かり、お互いにネットワークを通して活発に連絡を取り合えるようになれば、事後活動の内容も変わってくるはずですが、また、この SIGA の開催の連絡もネットワークを作ろうとしていますので、他の回で同じような試みをなさっている方がいらっしゃいましたら情報交換をしたいので、以下の Address にご連絡下さい。

E-mail Address: <VZR05303@niftyserve.or.jp>

SIGA へのオブザーバー参加

山口大学3年
青戸 俊恵

まず始めに、この話を勧めてくださった中野さんをはじめ、フィリピンで状況を把握していない山大3人組の面倒を見てくださった IYEO の方々に感謝しています。ありがとうございました。

▼ 山口県からの3人組（筆者中央）



私にとって、この SIGA に参加して、多くのものを得ることができました。その中から、今日は三つをとりあげたいと思います。一つ目は、アジアに関心を持つことができたことです。今までの私は、全くと言っていいほどアジアについて知りませんでした。今回アジアの国を訪れ、またフィリピンだけでなくいろいろな国の人と接することができて、アジアに関する興味がわきました。今まであまり知らなかったアジアの国は、実はヨーロッパなどに比べてとても近いところにあり、わくわくすることが沢山あるところだと分かりました。今まで近いけれど遠かったアジアがやっと本当に近いと思えるようになりました。

二つ目は、自分の無知なところを実感し、勉強する意欲に駆られたことです。せっかく出会った人々の国のことを知りたいと思いました。また、私は英語に関しても話したり聞いたりすることはほとんどできず、英語力の無さを痛感しました。他の日本の方の英語の堪能さにますますショックを受けました。皆さんが外国の友達と日本語で話すのと変わらないように会話されているのを見て、

とてもうらやましく思うのと同時に、英語も勉強しなければと思いました。英語ができればできるだけ他の人とコミュニケーションができるのだ！と信じてこれから英語力をつけていきたいと思えます。

三つ目は、SIGA でしか得られないことです。それらは一つの国に行っただけなのに、他のアジアの国々の人と出会うことができたこと、フィリピンの伝統的な歌やダンスを見ることができたこと、SIGA の後ホームステイができたことなどです。普通の観光客としてフィリピンに行っていたら、絶対にできない体験です。とてもうれしかったです。

今回、オブザーバーとして参加し、初め友達がいなくて寂しい思いもしましたが、皆さんが「東南アジア青年の船」の参加者でも IYEO の会員でもない私達を優しく迎えてくださったおかげで、沢山のひとと仲良くなれて、とてもうれしかったです。貴重な経験の場を提供してくれる SIGA や IYEO に多くの人が参加してくれることを願っています。本当にありがとうございました。

ジョルダン

ジョルダン再訪に思うこと

平成 6 年度国際青年育成交流

ジョルダン派遣団副団長 佐藤 正昭

■ 事業参加から得たもの ■

「人工物が全くない早朝の赤い砂漠の真ん中に立っていると、喧騒の中で働く日本いる時の自分が不思議に思えてくる…。」

私は、事業参加後も 2 回ジョルダンを再訪する

機会に恵まれた。3 度目となったこの 3 月に Wadi Rum を訪れた際にふとが思ったことであった。

初訪問の際には、イスラエルと PLO 暫定自治が始まったばかりであること以外、正直いって、中東の地についてあまり深い知識を持ち合わせい



◀ 中央、ジョルダン青年省事務次官
右側から近藤補佐（本事業担当）、筆者

なかった。中東和平の行方よりも、「国際青年育成交流」事業が目指しているボランティア活動の体験というものがどのようなものであるのかが不安であった。幸にもジョルダンでは、青年海外協力隊の隊員の方々の宿舎に寝泊まりしながら、その活動の現場視察及び地域のアラブ人との交流の機会を得ることができた。隊員の方々の仕事は専門的な分野が多く、直接彼らの仕事を手伝うことができないこともあったが、隊員が異郷の地で現地の人々の中で働くためにどのようなことに気を配っているかは理解できたように思う。

それは結局、現地の生活や「人」をきちんと理解するということが基本であり、そのことを怠っては、独り善がりな援助に終わってしまうということである。冒頭で「砂漠の中の自分を不思議に思った」と書いたが、これは、自然環境の差異からくる生活の違いを改めて想像した結果から沸き起こった感情であった。

■ 新しい派遣団員へ ■

では、現地を知り、その知識を活かすためにはどうすればいいのか。それは、まず日本を知り、現地と比較することから始まるのではなかろうか。現地の本当のことはやはり現地の人との交流から知ることが何よりである。しかしながら、ローマ

時代の遺跡を始め、いたる所で世界史を肌で感じることができ、また、「中東のへそ」と呼ばれパレスティナ問題の当事者であるジョルダンでは、国民は皆、自分達の国益を大なり小なり常日頃から考えている。「そんな国民と話をするには、自分の国の事を十分知ってからではないと表面的な会話だけで終わってしまうのではないだろうか」と事業参加後2年経って改めて感じている。

なお、当該事業による派遣は僅かな滞在期間であるから、何でも知ってやろうという貪欲さも大切な要素である。

■ 変貌を遂げるジョルダン ■

最後に、最初の訪問から僅か1年半の間に変貌を遂げたジョルダンについて紹介しておきたい。

原稿執筆時、イスラエルの首相が変わり中東和平の先行きがどうなるのか気がかりであるが、イスラエルとの国境を開いたころから、ジョルダン政府の観光開発政策も手伝って、かなりの観光客が訪れるようになった模様で、砂漠に不似合いな新型の大型バスが有名ホテル、有名観光地には大挙押し寄せており、欧州方式の携帯電話まで登場していた。ペドウィンの姿もそのうち全く見ることができなくなってしまうのだろうか…。

再訪からの帰国の飛行機の中で、私は、中東和平が進展した世界で、エジプト、イスラエル及びジョルダン3か国が国境を接する紅海アカバ湾に「世界青年の船」が寄港することを夢みていた。

〔電子メール masaaki@ibm.net〕

佐藤さんが、第1回国際青年育成交流ジョルダン派遣団報告の概要をインターネットのホームページで公開しています。アクセスしてみてください。

〔<http://www.sainet.or.jp/msato>〕

現在の国際社会において日本が考えるべき新たな視点

～冷戦後の国際システムと アジア太平洋地域の課題～

上智大学法学部教授
猪口 邦子

デモクラティック・ピース

現在、私たちは大変大きな歴史の転換点に立っています。今こそ、この20世紀は一体どのような世紀であったのかと、振り返ってみるのにふさわしい時だと言えます。欧州では、20世紀は戦争の世紀であったといわれています。20世紀には、大きな三つの大国間の戦争、つまり、第1次世界大戦、第2次世界大戦、そして冷戦が相次いで行われました。欧州の言論界では、これら1914年から1989年までの75年間を75年戦争と呼んでいます。この75年戦争とは、大国間で実際に激しい戦闘が行われていたか、または膨大な費用をかけた軍拡と同時に、戦禍から立ち直ろうと必死の努力をしていた独特の軍事的な歴史の期間なのです。

まず、これらの期間に国際秩序がどのようにできたのかということをお話したいと思います。これを知ることは、これからの国際秩序がどのような考えに則って形成されるかということを知ることにもなるからです。この戦争を終わらせたものはこれだ、あるいは戦後の秩序の仕切り軸になったものはこれだというものがあります。第2次世



界大戦を終わらせたものは、基本的には核兵器、原爆投下であると世界は考えています。したがって、第2次世界大戦後の世界においては、核兵器による国際秩序がありました。平和とは核抑止、核の均衡で語られ、大国とは核所有によって証明され、核実験とはそのためのやむを得ない必要悪的なものとして是認されてきました。今、私たちは第2次世界大戦の次の大戦である冷戦が終わったところに立ち会っているのです。この戦争は大変なもので、米ソ間では熱戦はなかったのですが、アジアでは多数の戦死者を出し、その準備のために費やされた人的、経済的資源の大きさは計り知れないものでした。この冷戦を終わらせたものは何なのでしょう。これが、これから何十年間、あるいは永久に、核兵器に代わり国際秩序の仕切り軸になる可能性があるわけです。これが何かを

見極めることは、今後、国際秩序の中で日本が何らかの役割を果たしていく上で、決定的に重要です。世界は、今、答えを出しはじめています。それは民主主義です。ソ連邦の民主化と崩壊、東欧の民主化と解放により、冷戦構造は終わったのです。更に詳しく述べると、民主主義陣営の経済的優越の下に、最初の段階で東欧の重債務国を経済的に救済するなどの経済実務の観点から冷戦の切り崩しがあったのです。

イェール大学のブルース・ラセットは、'Grasping the Democratic Peace' という本を書きました。これには、民主主義国同士の戦争は実際に一度もなかったという経験則が実証されたという研究成果が示されています。20世紀のすべての戦争は、民主主義国と非民主主義国の戦争または非民主主義国同士の戦争であり、民主主義国同士の戦争はなかったのです。アメリカも民主主義国家に銃口を向けたことは一度もなかったのです。したがって、それぞれの地域システムの構成主体全てが民主化すると、お互いに銃口を向け合あうことがなくなり、そこでは戦争が起こらなくなります。このような考えをデモクラティック・ピースと言います。

開発途上国における民主化への道

このことを受けたクリントン大統領の年頭教書には、最近の研究によると民主主義国家同士には戦争が起こらないとされており、民主主義国を増やすということをアメリカの外交の主柱にするという言葉が入っています。これに基づいて、民主化支援策が、東欧を中心に、行われることとなりました。これが相次いで成功し、次はアジアという

段階にあるのです。

冷戦期においては、開発途上国が自国の国際的地位を向上させるためには、経済成長を第一に考えました。しかし、以上のような状況を踏まえ、今日では、経済成長に加えて民主化を進めることを考えはじめています。そして、現在、開発途上国は、猛然と民主化競争に出ています。そもそも国際社会とは評判で成立している小さな村のようなものです。そこで、評判を良くして様々な会議に参加させてもらったり、援助を獲得できるようにと、国家は画策しているわけです。

こういう時に一番敏感なのが分断国家なのです。その片方が民主化で一步先に行くと、国際的な認知と評価を獲得します。すると、民主化で遅れている方は、これに苛立って、場合によっては時代錯誤的な軍事戦略をちらつかせたりすることがあります。昨今の台湾海峡の例がそうでした。

日本における民主主義の課題

このような開発途上国の民主化競争中で、日本は、自らの民主主義の内実をもっと強化しなければ、とても地域の主要国として、胸を張ることはできないであろうと思います。制度としての民主主義は完璧に近いと思います。しかし、昨今の政治腐敗や投票率の低下などの政治不信を考えると民主主義の成熟度が今一つであるという問題を抱えています。また、民主主義の担い手となり得るNGOやNPOの組織化が弱いという問題を抱えています。つまり、民主主義の足腰が弱いという問題を、日本はこの新しいパックスデモクラティカの時代に向けて考えなければならぬのです。以上のように考えると、日本の国際政治での課題と国

内の課題は、ワンセットになっているといえます。

民主主義による平和

民主主義が国際秩序の仕切り軸になる例は他にもあります。戦争はどのように終結するかについて考えてみましょう。冷戦期では、力づくで相手を降参させたり、領土について密約を交わしてお互いに手を引くなど、一般の国民や市民に無縁な軍事的勝利によって終結していました。しかし、民主主義が極めて重視される時代では、戦争も民主化によって終わらせることとなります。カンボディアでは、長年、武力で内戦を終わらせようとしてきましたが、30年経っても終わりませんでした。しかし、明石代表の率いる国連の行政機構を代行する国連カンボディア暫定統治機構(UNCTAC)による総選挙の実施で、遂に終わったのです。また、ボスニア紛争でも、1995年12月に、和平協定の仮調印がなされました。そのきっかけとなったのは、総選挙の実施です。つまり、地域紛争を総選挙の実施により解決するという方法が確立したのです。総選挙の監視を地域の平和組織が行い、それが地域に育っていないアジアのような場合には国連が行うのです。

民主主義が成立するには、ある程度の教育水準、所得、情報の普及が必要だという意見があります。しかし、有権者の半分も投票に行かないことのある日本に対して、カンボディアでは文盲の人も含めて投票所の前に晴れ着を着て長蛇の列を作ったのです。このようなことを考えると、民主主義が成立するには教育、所得、情報の条件は必ずしも必要ではないのです。むしろ、民主主義が成立した後で政府がこれらの課題にどのように取り組む

のかが問題なのです。

また、日米の通商交渉においても民主主義の時代という考えが貫かれています。アメリカは、個別・具体的な問題より、社会の原理を問いただしているのです。民主主義が重要な時代では、政治だけでなく、社会や経済も民主的な原理で運営されなければならないという考えに則って、経済の開放や透明性や情報の公開を要求しているのです。

アジアにおける日本の役割

いずれにしても、これからは核兵器に代わって民主主義が国際政治の仕切り軸になるのです。その意味では新しい展望のある社会の入口に私たちは立っているのです。そこにおいて、日本が指導力を発揮できるかという課題があります。確かに、核兵器の時代では、核兵器保有国ではなかった日本には指導力はなかったでしょう。しかし、民主主義の時代になったからといって、指導力を発揮できる保証があるわけではありません。自分たちの民主主義を世界に確固たる水準のものに仕上げてこそ、他者にそれを説く立場に立つわけですから。



日本が民主主義を説く立場に立たないと、アジアにおいてもアメリカが説く立場に立つわけです。そうすると、文明の違いなどにより、アジアから強い反発が起こることもあるでしょう。また、アメリカもこのような反発に嫌気がさして、アジアを見捨てるかもしれません。だから、日本のようにアジアの国でありながら、民主化を遂げた国が、文明の架け橋となるべきなのです。アメリカが出てくる前に、アジアの問題はアジアで解決できるということをお互いに合意して実行していくことが重要です。つまり、アジアの民主化支援が日本の課題になっているのです。

冷戦期では、突然、世界的な核戦争が起きる可能性があり、地域の平和など、みんな考えなかったのです。しかし、冷戦後では、地域の平和が重要になってきます。欧州ではボスニアが民主化されれば、全員民主化したことになり、永久平和の地域に逃げ込むことができます。しかし、まだまだ民主主義国の少ないアジアではそうはいきません。国というものは引っ越しできないので、自分の位置する地域というのを大事に考えないといけません。日本が、自分の位置する地域で平和の営みにどれ程貢献したかと考えると、心もとない限

りです。

民主化を支援する時、内政干渉という19世紀の軍事国家間で議論された観念に囚われる必要はありません。21世紀に向かう国境を超えた問題がクローズアップされる時代には、内政干渉という言葉は限定的に使われるべきです。相手国の文化を尊重するという名目で、相手国の人権弾圧などを看過することは良くありません。人権とか環境とかは国境なき問題です。アジアにおける民主化や人権を、日本はもっと敏感に考え、それらを広める立場に立つことが重要だと思います。

(以下次号)

4月21日に行われた「第7回青年国際理解セミナー」において講演されたものです。
今回より3回に分けて掲載します。



◆ 一口メモ ◆

国際連合 (The United Nations……UN)

名称は、アメリカのルーズベルト大統領が考えたもので、1942年1月1日、26か国の代表が日独伊の枢軸国に対する徹底抗戦を約し発表した連合宣言の中で初めて使われた。1945年6月、サンフランシスコの50か国の代表を集めて開かれた連合国会議で国際連合憲章が調印され、国際連盟を継承する新しい国際平和機構となった。

本部をニューヨークに置き、現在の加盟国184。国連憲章の正文並びに安保理事会の公用語及び常用語は、中・英・仏・露・スペインの5か国語。総会については、アラビア語が加わる。

青少年対策本部国際交流事業担当係紹介

■国際交流第1係

国際青年育成交流（派遣・招へい）／日・中青年親善交流／日・韓青年親善交流／アジア太平洋青年招へいの各事業を担当。派遣と招へいの両分野を扱うため、今や1年中忙しい係。近藤補佐は、1昨年の日韓青年親善交流派遣団の副団長。新婚早々で激務の渡辺係長。親分肌の小西専門官、優しげに見える？遠藤専門職、面倒見のいい河野係員、はきはきタイプの荻原係員の総勢6名で、37か国からの窓口となるのです。

（前号で総務庁青少年対策本部の国際交流担当の中の国際交流振興係を紹介しましたが、今回は各事業を今年度担当するメンバーを紹介します。）



■国際交流第2係

「世界青年の船」担当。現在、来年1月に出航する「第9回世界青年の船」のプログラム作りに余念がないところ。交流を愛してやまない盛本補佐と普段は優しいけれど切れたら怖い石原係長は第8回の経験者。淡々と仕事を進める長藤係員、振興係から移動した国府田係員、いつもにこにこ中川係員。アカプルコでの世界青年の船第3回リユニオンでは、OBもお世話になります。

■国際交流第3係

「東南アジア青年の船」担当。23回を迎える歴史ある事業だが、ベトナムの正式参加で参加青年も増え、今後はプログラムの工夫も大きな課題。穏やかな新井補佐と新進気鋭の越田係長は2回目乗船。振興係兼務の幕田係員、沖縄からの仲間係員、気遣いの小川係員、かわいい声の米山係員。



「上州吉岡船尾太鼓」長野オリンピックへ

平成3年青年海外派遣南米班組

大島 倫明

過半は、私たちの活動を「マクロコズム」に取り上げていただき心より感謝申し上げます。

昨年の今頃は、海外講演の準備で大忙しだったのをなつかしく思い出しています。

今年は、「こんな田舎の小さな町に住んでたって国際ボランティアはできるんだ!」を合言葉に、地元中学の吹奏楽部と前橋市のマンドリン楽団とチャリティーコンサートを開催します。いただいた募金をワクチンに換えて世界の子供に贈る計画をしているところです。「この太鼓を世界の子供たちのために使えたら、どんなに素晴らしいだろう」とメンバーといつも話しています。

お蔭様で、長野オリンピックでも演奏することになりました。地元の長野県太鼓連盟の方々と一緒に開会式のセレモニーで2,000人太鼓でギネスに挑戦します。

いつか機会がありましたら、IYEO会員の皆様にも私たちの演奏を聞いていただけたらと願っております。

センターの益々のご活躍と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

センターの益々のご活躍と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

研修旅行二題

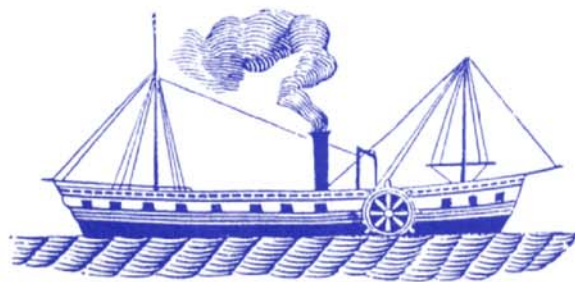
平成6年度国際青年育成交流

タンザニア班副団長 加藤由美子

現在、小学校から社会人までの留学をお世話する会社で働いています。当世の留学事情というのは様々。そのニーズに合わせ、今回二つの研修旅行を企画しました。一つは「アジアの智慧を知る研修旅行～タイの教育を見つめる～(8/22～8/31)」バンコクやチェンマイの幼稚園から大学まで訪問し、学生たちとの交流を通してタイの教育を垣間見るといふもの。

もう一つは、社会福祉に興味のある方を対象にした「社会福祉実習 in USA (9/2～9/16)」サンフランシスコ郊外で身体障害者施設や老人ホームを

視察・ボランティアをしながらアメリカの福祉を学びます。(興味のある方は、海外教育コンサルタント/飯塚 TEL.03-3408-2901 FAX.03-3478-4350までご連絡下さい。)一味違ったプログラムを体験してみたいという方に、ぜひお勧めしたいプログラムです。



国際交流スタディツアー

マレーシアふれあい物語

8月28日～9月2日 東京・大阪発着 124,000円

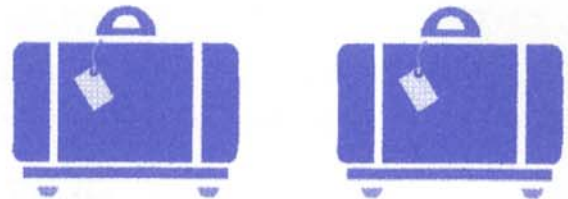
日付	スケジュール
8月28日	東京(午前発)→クアラルンプール(夕方着) 大阪(午前発)→クアラルンプール(夜着)
8月29日	午前：市内観光 午後：マレーシア同窓会による歓迎会 ホームステイ家庭との対面式 各家庭へ
8月30日	終日ホームステイ体験
8月31日	ホテル戻り→独立記念パレード見学→ フェアウェルパーティ
9月1日	終日自由時間/夜クアラルンプール発 東京・大阪共に9月2日着

ホームステイあり、SSEAYP ALUMNI MALAYSIAのフルサポートありと、「現地交流型」のツアーです。パックツアーでは味わえない**出会いの感動**が、皆様をお待ちしています。

募集人員：15名（最小催行人員10名）

申込締切日：1996年7月19日（金）

*定員になり次第締切らせていただきます。



〈お問い合わせ・お申し込み〉

（財）青少年国際交流推進センターまで

編集後記

4月に就職して地方赴任したメンバーからFAXが入った。近況報告とともに、連日のハードな活動日程を仲間と協力しあった体験に感謝する言葉

を添えてくれていた。在京でも研修で顔を出せなかった組も落ち着き、活動に復帰してくれるようになり心強いかぎりである。ガンバレ新社会人！

*本誌の年間講読をご希望の方は、（財）青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申し込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM (マクロコズム) 7月号 Vol.11 1996年7月1日発行 (隔月発行)

編集：マクロコズム編集委員会

発行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

e-mail LDP04056@niftyserve.or.jp

編集協力：総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定価：195円（本体189円）

印刷所：株式会社 絢文社

TEL 03-3959-3960



▲ フィリピンのエストラーデ副大統領に記念品を渡す IYEO 大森会長



▶ 総務庁長官のメッセージを代読する
林国際交流参事官

9th SIGA

SSEAYP International 第9回総会が、5月1日から4日の日程でフィリピンのマニラ市外にて開催されました。

日本とアセアン6か国で150名が参加した大きな大会となりました。



◀ 日本を代表して「第22回東南アジア青年の船」の体験報告をする山田君

今後の活動について

▼ グループディスカッション



◀ 全体会で活動報告をする各国代表者



SSEAYP Int. の活動のために ▶
ラッフルで資金集め





◀ ビラ・エスカドーレでリラックスタイム

▼ フェアウェル・パーティでロイ・クラトンを踊る(タイ)



次回開催国ブルネイ代表に、SSEAYP International ▶
の旗を渡すフィリピンのグレッグ会長



▼ 「上を向いて歩こう」を踊りとともに大合唱(日本)



都道府県

〔会員の交流会は、次の活動へのエネルギーに〕

▼ 栃木県青年国際交流機構(ぶどう狩交流会)



▼ 山形県青年国際交流機構(スキー交流会)

